聖　書：コリント人への手紙第二 2：12〜17
説教題：キリストの香り
日　時：2024 年 10 月 6 日（朝拝）

パウロは 2 章 4 節でエペソから涙ながらにコリント教会に手紙を書いたことを述べましたが、今日の 12〜13 節には、その後の彼の足取りが記されています。エペソでの伝道に区切りをつけた彼はトロアスへ向かいました。トロアスは小アジア北部の町です。使徒の働きを良く読んでいる方なら特別な町であることを思い起こされると思います。第二次伝道旅行でパウロはおそらくエペソ伝道を志したようですが、御霊によって禁じられて、不思議な仕方でこのトロアスへと導かれました。そしてそこで彼は幻の中で一人のマケドニア人が立って「マケドニアに渡って来て、私たちを助けてください」と懇願するのを見て海を渡り、ヨーロッパ伝道が導かれるに至りました。そのような思い出深い地です。パウロは今回キリストの福音を伝えるために、このトロアスへ行きました。そしておそらくその後、マケドニアに渡り、それから状況を見てコリントへ行くことを計画していたと思われます。

パウロはどうやらこのトロアスでテトスと落ち合う手はずだったようです。テトスは先の涙ながらにパウロが書いた手紙をコリントへ運んだ人です。その彼がコリント教会の様子をこのトロアスでパウロに教えてくれる予定になっていました。しかしなかなか彼はこの地にやって来ません。そのため、パウロは落ち着きがなく、心に安らぎがありませんでした。そこで彼はマケドニアに向けて出発したとあります。おそらくこの時は冬で、これ以上待つと翌年の春まで海を渡ることはできなくなるからでしょうか、その前に彼は、よりコリントに近い次の候補地マケドニアへと渡ったのです。これはパウロがいかにコリント教会のことを思っていたかという証です。トロアスでは主が私のために門を開いていたとありますように伝道の好機がありました。良いチャンスがありました。しかしそれを後にしてでもパウロはコリント教会のことが気がかりで、先へ進んだのです。パウロは決してコリント教会を見捨てていたのではなく、むしろ彼らを深く心にかけていました。その思いを彼はここに吐露しています。

さてマケドニアに行った後はどうだったのでしょうか。何とこの続きが記されるのは 7 章 5 節になります。7 章 5〜7 節：「マケドニアに着いたとき、私たちの身には全く安らぎがなく、あらゆることで苦しんでいました。外には戦いが、内には恐れがあ

りました。しかし、気落ちした者を慰めてくださる神は、テトスが来たことで私たちを慰めてくださいました。テトスが来たことだけでなく、彼があなたがたから受けた慰めによっても、私たちは慰められました。私を慕うあなたがたの思い、あなたがたの深い悲しみ、私に対する熱意を知らされて、私はますます喜びにあふれました。」パウロはこのようにマケドニアでテトスに会い、あの涙の手紙がコリント教会に受け止められたことを知りました。そのことに安堵して、このコリント人への手紙第二を執筆し、自らがコリントへ赴く前に送ったのです。このように 2 章 13 節は 7 章 5 節以降に良くつながることになります。その間にいわば長大な挿入があることになります。なぜ彼はこんな書き方をしたのでしょうか。これから見る 2 章 14 節以降は、間に挟まれた部分だから重要ではないということにはなりません。むしろ重要だからパウロはここで話を止めて 7 章 4 節までのことを書いたのです。むしろここにこの書の中心メッセージがあるとさえ言うことができます。パウロはここでこの書のテーマである使徒としての弁明、福音を伝える使徒はどのようなものなのかを書いて行くのです。

ではその 14 節以降を見て行きます。14 節は「しかし、神に感謝します。神はいつでも、私たちをキリストによる凱旋の行列に加え、私たちを通してキリストを知る知識の香りを、いたるところで放ってくださいます」と始まります。ここにあるイメージは勝利の凱旋です。昔、戦争の勝者は祖国に帰って来た時、戦利品を携え、捕虜を従えながら、町の中を練り歩き、勝利のパレードをしました。その行列に神は私たちを加えるとパウロは言っています。ここで意見が分かれるのは、ではパウロたちはどういう立場でこの凱旋行列に加えられるのかということです。ある人たちは勝利者として加えられると見ます。この手紙のこれまでの部分では、パウロの苦難とか、誤解とか、涙とか、安らぎがないといった苦しい状態のことが書かれて来ました。しかし神はついにはそのようなものから解き放って勝利の行進に加えてくださる。そしてキリストの香りを放つ者としてくださると。しかし別の人たちは、パウロたちは捕虜としてこの行列に加えられると見ます。似たようなイメージの言葉として I コリント 4 章 9 節に次のようにあります。「私はこう思います。神は私たち使徒を、死罪に決まった者のように、最後の出場者として引き出されました。こうして私たちは、世界に対し、御使いたちにも人々にも見せ物になりました。」　あるいはこの第二の手紙 4 章 10 節に「私たちは、いつもイエスの死を身に帯びています。それはまた、イエスのいのちが私たちの身に現れるためです」とあり、「いつもイエスの死を帯びている」とい

う表現は捕虜のイメージとピッタリ重なるかもしれません。パウロは他の箇所でも自らをキリストの奴隷、キリストのしもべと表現しています。この手紙もここまでパウロが経験している苦難、誤解、辱しめ、悩みなどを記して来ましたが、これらもキリストの捕虜として、この行列に加えられているパウロの姿を描くものと言えるかもしれません。このどちらを取るべきか、両方とも支持者がそれなりにいて、決定的なことを言うのは難しいようです。一般的には後者の立場を取る学者の方が多いようです。そしてもし前者を取る場合でも、いわゆる勝利主義のように理解しないようにだけは注意すべきであると思います。勝利主義、まさにそれがコリント教会に生じていた問題でした。自称大使徒たちはパウロが経験している苦しみを見て軽蔑し、見下していました。あのような弱い状態にある者が使徒であるはずがないと。神に立てられた使徒はもっと強く、立派で、輝かしい状態になければならない。苦しみの状態にあるということは、神の守りや祝福がない証拠であると。そのような繁栄主義、成功主義、勝利主義に立っていました。そんな彼らに対してパウロは弱さの内に現れる神の力、神の栄光について語ります。この手紙の 12 章 9 節にある「ですから私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう」というパウロの言葉が思い起こされます。

さてパウロがどのような立場でこの凱旋に加えられるかについては議論がありますが、その後のメッセージははっきりしています。その行進において神は「私たちを通してキリストを知る知識の香りを、いたるところで放ってくださいます」とあります。これは当時の凱旋行列において香が焚かれたことを背景としているようです。そのような香りがパウロたちの行くところどこにでも漂うと言います。その香りとは「キリストを知る知識の香り」です。この知識とは聖書の他の箇所でもそうであるように単なる知識ではなく、人格的知識ということです。参考になる御言葉としてピリピ人への手紙 3 章 8 節をあげられると思います。「それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、私はすべてを損と思っています。私はキリストのゆえにすべてを失いましたが、それらはちりあくただと考えています。」　パウロにとってキリストを知ることにまさるものはありませんでした。他のものは比較する時、すべてごみくずと思われるほど、キリストを知ることはこの上もなく素晴らしいことでした。何と言ってもそれは私の救いのために、その尊いいのちさえも投げ出してくださった愛のお方を知ることです。またその方がくださる素晴らしい救いの数々を知って行くことです。確かにこれにまさって素晴らしいものはこの

世に他にないとクリスチャンなら誰でも思うでしょう。そしてそのようにキリストをすべてにまさる宝と思う人は自分もそのキリストのようになりたいと思うはずです。ですからパウロは先ほどのピリピ書 3 章 8 節の続きで、「私は、キリストとその復活の力を知り、キリストの苦難にもあずかって、キリストの死と同じ状態になり、何とかして死者の中からの復活に達したいのです」と言っていました。一言で言えばキリストに似た者となることです。そのような人には確かにキリストの香りがあると言えます。その人が通るところには、まるでキリストがそこを通られたかのような、そのような香りが放たれるということです。

次の 15 節には「私たちは、救われる人々の中でも、滅びる人々の中でも、神に献げられた芳しいキリストの香りなのです」とあります。ここに神に献げられた芳しい香りという表現が出て来ます。この背景にあるのは創世記 8 章 21 節で、洪水後にノアが全焼のささげ物を献げた時、神はその芳ばしい香りをかがれたとあることです。神に献げられる芳ばしい香りというものがあるのです。そしてそれが指し示す真に神の前に芳ばしい香りとはキリストの十字架における犠牲です。エペソ人への手紙 5 章 2 節 :「キリストも私たちを愛して、私たちのために、ご自分を神へのささげ物、またいけにえとし、芳ばしい香りを献げてくださいました。」しかし今見ているⅡコリント 2 章 15 節は、キリストではなく私たちのことを言っています。私たちを指して「神に献げられた芳しいキリストの香り」なのであると。つまりこれは私たちのためにご自分を神に献げて芳ばしい香りとなられたイエス・キリストと私たちが結ばれて、私たち自身がキリストの芳ばしい香りそのものを放つ者になるということです。私たち自身がキリストにそっくりの者、キリストを映し出す者になることです。そしてそこには、キリストが私たちを愛してご自身を献げたように、私たちもキリストに倣って愛による犠牲的な歩みをすること、進んで苦難の道も行くこと、そうして仕えるしもべの歩みをすることも含まれるでしょう。そのようなキリストを映し出す犠牲的な歩みをささげる時、それは神の前に芳しい香りとなって立ち上り、神に喜ばれるものとなる。確かにそうです。もし私たちがキリストを信じたと言っても、苦難はよけて通り、いわばいいとこどりだけをするような歩みをしたらどうでしょうか。祝福や栄光にあやかることばかり求めて、主のための労苦や犠牲を毛嫌いし、疎んじているならどうでしょうか。そのような人からはキリストの香りは全然感じないですよね。むしろ世俗的な匂い、コリントにいた勝利主義者たちのような匂いがします。そうではなく、やはり主を喜び、主への感謝と愛に押し出されて、与えられるものであれば喜んで犠

牲を払う道をも行く。そこにおいていよいよ主と深く結ばれる交わりに生きて行く。そういう人の周りには確かにキリストの香りが漂っています。それは神の前に立ち上る芳しいキリストの香りなのです。

しかしながらこれは誰にでも喜んで受け入れられる香りではないことが 16 節に言われます。その香りは人々を二分します。まず「滅びる人々にとっては、死から出て死に至らせる香り」とあります。キリストの香りはある人々にとってはそうなります。なぜならその中心に十字架のメッセージがあるからです。キリスト教に全体として好感を持つ人々でさえ、十字架のメッセージにはつまずきます。キリスト教の色々な祝福にはあずかりたいが、あの十字架にかかって死んだ人を自分の人生の主、また神として仰ぐという気持ちには到底なれない。あれのどこがそんなに良いのかと。確かにそこにはある種の死の匂いがあるわけです。またそのキリストを信じる信者たちも、そのキリストの十字架に倣って歩むという。あのようには私はなりたくない、と思ってこの肝心な点で拒絶するわけです。こうしてその人々は益々死に至る道を進むことになります。一方、キリストの香りは「救われる人々にとっては、いのちから出ていのちに至らせる香り」です。確かにキリスト教の中心には十字架があります。しかしこちらの人々は、それを単なる死とは見ません。むしろそれは自分たちにいのちを与えるものと見ます。この十字架においてこそ真のいのちが私たちに開かれていると見ます。それゆえに信じて受け入れ、いのちへと至る道を進みます。私たちはこのように人々の永遠の運命を二分する者たちとして立てられていると言います。この厳粛さを思うなら、「このような務めにふさわしい人は、いったいだれでしょうか」とパウロは問います。答えは「誰もいない」ですね。人間的に考えればそうです。しかしただ神によってその資格が恵みとして与えられることをパウロはこの後、3 章 5 節で述べます。

そのために大切なのが最後の 17 節です。それは神の言葉、福音に混ぜ物をしないことです。ここに「多くの人たちのように」とありますが、これがコリント教会に入り込んでいた偽使徒、偽教師たちのことです。彼らは神の言葉に混ぜ物をしていました。福音を改変していました。彼らは先に述べたように苦難を除こうとします。そして成功主義、繁栄主義のメッセージに変えていました。人々に受けるように十字架とか、苦難とか、人々が顔をしかめるような要素は取り除き、強さとか成功とか自信といったものを高く掲げ、人々にアピールしようとしました。それによってコリント人

たちも動かされつつありました。しかしキリストの香りとして歩む者に求められているのは、神の言葉に混ぜ物をせず、誠実に、神からの者として歩むことです。神の御前にあることを覚えて、つまりいつもその日が最後のさばきの日であるかのように捉えて、キリストに結ばれている者として福音を語り、その福音に生きる人です。この福音に立つ人こそ、その務めにふさわしいとされる人であり、そういう人こそキリストの香りを放つ者であるとパウロは言っているのです。

私たちはこの御言葉の前にどうでしょうか。私たちはキリストの香りを放っている者でしょうか。そのために必要なことはキリストを益々知る道を行くことです。14 節に私たちの香りは「キリストを知る知識の香り」と言われていました。みことばを通して益々キリストを知り、キリストに学び、キリストに感謝し、キリストに押し出されて、キリストに倣う歩みをする者とされたいと思います。そこには「キリストの苦難」と呼ばれる道もあります。イエス様は「だれでもわたしに従って来たければ、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい」と言われました。パウロもこれまで見て来たように、このイエス様に従って、苦難や、人々からの誤解や中傷、また涙、人々のために心配するといった中を歩んで来ました。これはキリストに従う愛の道を歩むがゆえに彼が経験して来たことです。しかしそういう歩みの中でパウロは、神はいつでも、また至るところで、私たちを通してキリストの香りを放ってくださると感謝しました。私たちもキリストを益々知り、キリストに学び、キリストを愛し、キリストに従って、至るところで神によってキリストの香りを放つ者とされたいと願います。皆がこの香りを喜んで受け入れるわけではないかもしれません。しかしその香りをかいで、いのちからいのちへと進む方が起こされます。私たちは恐れつつこの務めを受け、神のみわざのために用いられる特権と光栄に歩む者とされたく思います。